

け や き



「たくましく生き抜く力」を育む

大仙市教育委員会 教育長 伊藤 雅己

新型コロナウイルス感染症が5類となり、ようやく当たり前の日常が戻ってきた感があった一方、夏の猛暑、暖冬に雪不足と、新たな対応が求められた1年でした。自然災害をはじめ、「これまで経験したことの無い〇〇」といった表現が珍しくなくなり、人間の知恵と勇気が試されていると感じています。どんな困難な状況にあっても、「たくましく生き抜く力」が求められているのです。

〇環境を力に

同じような環境や経験をしても、確かな力にできる人とそうではない人がいます。その違いは何なのか。一番大きな要因は、現実を受け入れ、前向きに努力できるかどうかの差ではないかと感じています。そういう人には、必ず周囲からの支援がってきます。意気に感じひたむきに努力している姿を、周囲は放っておかないはずですよ。どんな環境に置かれても、思いをもって行動し、知らず知らずのう

大仙・美郷不登校適応指導教室「フレッシュ広場」

「教育支援センター」として機能強化を図ります

大仙市教育委員会事務局 指導主事 中山 憲太郎

平成11年度から、不登校適応指導教室「フレッシュ広場」を美郷町教育委員会と共同開設し、「学びのサポート」「体験的活動のサポート」「心のサポート」を実現して参りました。通所している子どもたちの様子に常に気を配った温かな言葉がけとともに、子どもたちにとって安心できる心の居場所となるように教室を運営しております。

GIGAスクール端末導入後は、Teamsによる情報共有体制を整え、フレッシュ広場と通所者学籍校・関係職員との情報交換が格段に密になりました。この紙面をお借りして、専任指導員をはじめとするスタッフ、各学校の皆様へ改めて感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

フレッシュ広場は令和6年度から「大仙・美郷教育支援センター」として運営されていきます。文部科学省がとりまとめたCOCOLOプランを受け、誰一人取り残されない学びの保障を実現するため、サポートを続けていきます。また、GIGA端末の活用、外部関係団体との連携強化、不登校児童生徒の保護者の情報交換の場の整備などの充実を目指して取り組んでいきたいと構想しております。今後どうぞよろしくお願いたします。

ちに自分自身を高めていくことができる力を育む必要があると強く感じています。

〇意味付け、価値付け

なぜやらなければならないのか、やりたくないからやらない、ごく当たり前の感情かもしれません。しかし、義務的に参加した会議で大きな刺激を受ける、仕事上の出会いが親しい関係に発展するなどの経験は枚挙にいとまがありません。経験することで新たな世界が見えてきます。自らが意味付け、価値付けし前向きに進められるかどうか勝負の分水嶺目。ただ時間が過ぎるのを待つのか、何かを見出そうとするのか。時間や経験を自分自身の力にしようとする心を育む必要があると強く感じています。

次代を担う子どもたちのために何ができるのか。教職員の皆様にも、機会を捉えて、自らの経験を自らの言葉で語り続けることを期待します。

働き方改革

時間外在校等時間削減3本の矢

大仙市教育委員会事務局 教育指導課長 藤原 秀一

「2021教職員が実感できる多忙化防止計画」のもと市独自に業務改善推進計画を策定した。また、各校においても計画を策定し、学校の重点事項として業務改善に取り組んできた。次の表は、2021年（令和3年）の人数を100（%）とした時間外在校等時間の3年間の比較表である。

時間外在校等時間の削減は進んでいるが、まだ十分とはいえない現状である。

特に中学校は取組の強化が必要といえる。今後、さらに改革を進めるために、市教委の目玉として、次の3本の矢を設定し、重点的に進めていく。

1. 大仙市立学校教育職員の業務量の適切な管理等に関する規則（上限規則）の制定
2. 統合型校務支援システムの運用
3. 休日の部活動の地域移行

市や各学校の業務改善推進計画の見直しを進め、令和6年度からの3年間を学校における働き方改革の集中改革期間として取り組んでいく。

	45時間以上		80時間以上		360時間以上	
	小	中	小	中	小	中
R4	95.5	108.9	96.6	115.6	92.4	107.3
R5	66.4	102.8	48.3	89.9	65.5	94.9

共 (ともに) …共に支え合う力の育成
創 (つくる) …創造的に生き抜く力の育成
考 (かんがえる) …考え、生かす力の育成
開 (ひらく) …開き、信頼される学校

地域学校協働活動事業

大綱米プロジェクト

大仙市立西仙北中学校 校長 藤原 修悦

毎年2月10日に行われている国指定重要無形民俗文化財「刈和野の大綱引き」。これまでその形を変えることなく引き継がれてきた伝統行事であるが、後継者育成、大綱の原材料確保などの課題も多い。そこで、地域の幼保・小・中・高校が一丸となり、農業体験を通じて、地域の活性化を図ることを目的として、本プロジェクトが令和3年度より始動した。

〈今年度の活動〉

- ・5月：田植え
- ・9月：稲刈り

はさがけ

いずれも手作業で、3年生が体験した。収穫した稲わらは、刈和野の大綱引きの大綱製作の材料や小学生のグミ編み体験で使用される。

このプロジェクトを通して、生徒は伝統行事に単なる参加ではなく、「つくる」側として「支える」ことで、地域活性化の担い手としての意識を高めている。



〈稲刈り〉

大仙市中学生サミット

大仙市の未来は私たちがつくる！

大仙市教育委員会事務局 指導主事 石河 大介

今年度の中学生サミットは、大曲中・大曲西中・大曲南中3校の事務局校を中心に「SDGs プロジェクト 私たちの思いを地域と未来に『つなげて』いくには？」のテーマのもとに行われた。

事前にリモート会議を重ねて方向性を定め、迎えた8月8日。ふれあい文化センターでのサミットでは、大仙市総合政策課職員の基調講演を基に、ポスターセッション形式で各校の取り組みを紹介し合った。また、その後の自由交流では、各校で連携できそうなことを探る話合いが展開された。



〈自校の取組を発表する〉



〈他校と交流する〉

終末には、各校の話合いを受けた「サミット宣言」を採択。参加した児童生徒の眼差しには、本市の次世代を担っていく子どもたちの意欲が表れていた。

宣言：わたしたちの行動をつなげ、広げながら『ずっと住み続けたいまち大仙』の実現に向けて、各校での実践をさらにつなげ、多くの世代に広げ、未来につなげていきます。

部活動指導員配置事業

部活動指導員配置状況と今後の見通しについて

大仙市教育委員会事務局 指導主事 中山 憲太郎

本市では「大仙市部活動地域移行ビジョン」を定め、その中で

- ①令和6年度の夏における休日の部活動地域移行 30% (休日に活動している部活動に対して)
- ②令和7年度の夏における休日の部活動地域移行 60% (同上)
- ③令和8年度の春における休日の部活動地域移行 100% (同上)

という目標を設定しています。

また、国は「地域移行」と並行して「地域連携」を提案しており、その具体として「部活動指導員配置事業」を実施しています。いずれは完全に地域移行していくことを目指しながら、まずは補助事業により報酬を確保した部活動指導員の配置により生徒にとってよりよい部活動環境を整備していくものです。

目標達成のため、市では部活動地域移行支援コーディネーターを配置し、各校のニーズの聞き取り、受入可能団体・指導者の発掘を行っており、前記の「地域連携」も含めると、令和5年度末現在、①の達成の見通しがもてる段階までできています。今後も、各校におけるニーズや受入候補の団体や指導者についての情報の提供をお願いいたします。

次に、部活動指導員配置の状況についてお知らせいたします。令和5年度は3中学校の4部活動(中仙中学校バスケットボール部、協和中学校柔道部・ソフトテニス部、平和中学校ソフトテニス部)に部活動指導員を配置し、専門的な指導が受けられる環境を整備するとともに、当該部活動担当教員の年間時間外勤務を平均200.75時間削減することができました。令和6年度当初は6中学校の7部活動(中仙中学校バスケットボール部、協和中学校ソフトテニス部、平和中学校ソフトテニス部、仙北中学校軟式野球部、大曲中学校柔道部・合唱部、大曲南中学校吹奏楽部)に部活動指導員を配置し、年度内にさらに配置数を増やしていく方針です。

最後に、部活動地域移行の今後の見通しをお知らせいたします。まずは部活動指導員の配置増を含む地域の受入拡充を図ります。並行して、保護者・学校職員・地域への理解促進のため、モデルケースの紹介や説明会の開催等により情報発信を強化します。さらに、「地域クラブ」設立のためのマニュアル作成と公表、地域移行後の各種活動の全体を統括する「運営組織」の構築等を進めていきます。

教職員の働き方改革と同時に、子どもたちの「やりたい活動が選択できる」「大会・コンクール出場のためのチームが組める」「多様な関わりの中で練習ができる」「専門的な活動が受けられる」といった環境整備のための部活動地域移行に、ご理解とご協力をお願いいたします。

共（ともに）…共に支え合う力の育成
創（つくる）…創造的に生き抜く力の育成
考（かんがえる）…考え、生かす力の育成
開（ひらく）…開き、信頼される学校

「大仙ふるさと博士育成」事業

かけがえのない「体験」を

大仙市教育委員会事務局 指導主事 石河 大介

12,547人。事業開始から8年間で「大仙ふるさと博士」各級に認定された児童生徒の延べ人数である。200を超える事業所及びイベントを体験先リストとして登録している本事業の目玉は、夏・冬の企業見学&農業体験DAY。今年度は長期休業中に10回開催し、148人の児童生徒が参加した。



<企業見学DAY>

真剣な面持ちで一心不乱に農作物を収穫する子ども、興味津々な様子で工場を見回す子ども。収穫した野菜を大事そうに抱える姿や、機械について目を輝かせて質問する姿を見ると、これこそがかけがえのない体験であると強く感じる。



<農業体験DAY>

「大仙市内の小・中学生がふるさと大仙を好きになり、いつかふるさとで活躍する人になってほしい。」という願いのもと、これからも小・中学生が自主的に地域と関わる活動を応援していきたい。

「大仙市内の小・中学生がふるさと大仙を好きになり、いつかふるさとで活躍する人になってほしい。」という願いのもと、これからも小・中学生が自主的に地域と関わる活動を応援していきたい。

令和5年度子供の読書活動優秀実践校文部科学大臣表彰

読書活動継続の効果

大仙市立南外中学校 校長 佐々木 泰宏

本校では毎日行っている「朝の読書」に加え、「小学生への読み聞かせ」や「ビブリオバトル」などの読書活動にも取り組んできた。

「小学生への読み聞かせ」は、自己有用感の醸成をねらいとし、平成30年度から本校の2年生が南外小学校の全ての学年の教室に出向き、自分たちで選んだ本の読み聞かせを行っている。

令和3年度からは、表現力及び対話力の向上をねらいとして、全校で「ビブリオバトル」に取り組んできた。生徒全員がそれぞれのお薦め本の魅力を5分間でプレゼンした後、発表者と聞き手側の生徒による1分程度のディスカッションを行っている。

各種調査の本校3年生の自己評価では、「自己有用感」や「発表の意欲」に関する項目において、肯定的評価をしている生徒の割合が大変多くなった。また、「読書が好き」と回答した割合が全県平均を大きく上回ったことも含めて、調査結果には活動の積み重ねが影響していると捉えている。今後も生徒に必要な資質・能力の育成を目指し、読書活動の推進を図っていきたい。



<ビブリオバトル>

リーディングDXスクール事業

チーム学校でICTの活用推進

大仙市立豊成小学校 校長 高橋 めぐみ

中仙地区では今年度、文部科学省の指定を受け、リーディングDXスクール事業に取り組んできた。取組は途上であるが、大きな成果を得ることができた。実践事例は以下の通りである。



<個別最適な学び>

- ① 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につながるクラウド活用
- ② インターネット上の動画教材の活用、外部専門家によるオンライン授業の実施
- ③ 端末の日常的な持ち帰りによる家庭学習の充実と自律的な学習に向けた取組
- ④ クラウドを活用した校務の効率化と情報共有
- ⑤ クラウドを活用した研修の充実とICTに特化した研修
- ⑥ 保護者への連絡、アンケート、おたより等のデジタル配信

これからも、「みんなでチャレンジ!」を合い言葉に、効果的なICT活用の歩みを続け、たくましく生きる子どもの育成をめざしていきたい。

(取組の詳細は豊成小のHPで紹介しています)

リーディングDXスクール事業

1人1台端末の機能をもっと生かすには?

大仙市立中仙中学校 校長 渡邊 朋哉

2月下旬、各学級の予選を突破した精鋭5人と職員代表1名が今年のタイピング王決定戦に挑みました。張り詰めた緊張感と軽やかなタイピングの音に加え、対戦の様子が生配信されている教室から応援の声が響いています。



<タイピングコンテスト>

今年度は、リーディングDXスクール事業の拠点校として、①授業改善②校務改善③デジタルシブシブ教育の推進の3点を柱に教育活動のDX化に取り組まれました。特に③では、週1回のICT朝活を設定し、生徒のICT活用スキル向上を図りました。これにより授業でもストレスなくタブレットを活用した学習活動が可能になりました。今では、生徒会活動でもタブレットやTeamsの活用が当たり前になっています。

今年度の取組を通して、教員の意識は「何に使えばいいの」から「もっとタブレットの機能を活用したい」という方向に大きく変わりました。これが最大の成果かもしれません。今年度の取組の詳細は中仙中HPで紹介しています。ぜひご覧ください。

共（ともに）…共に支え合う力の育成
 創（つくる）…創造的に生き抜く力の育成
 考（かんがえる）…考え、生かす力の育成
 開（ひらく）…開き、信頼される学校

令和5年度文部科学大臣優秀教職員表彰
 「社会に開かれた教育実践奨励賞」（教職員組織）
 第14回ESD大賞 ESD優秀賞

「ストーリー」と「ネットワーク」で紡ぐESD実践

大仙市立大曲南中学校 教諭 佐々木 慎英

本校では、「『持続可能な社会の創り手となるための資質・能力』の育成」を最上位目標とし、その達成のために、ESDストーリーマップによるカリキュラム・マネジメントを行っている。

○ESDストーリーマップ

総合的な学習の時間の探究的な学習を軸として、各教科等の学習内容がどのように関わるかを表した。「教材のつながり」と外部人材の活用である「人のつながり」を表現している。単発の活動ではなく、3年間を見通し子ども目線でストーリー展開を実践している。



<ESDストーリーマップ>

○実践事例「未来のエコハウスを設計しよう！」

家庭科と総合的な学習の時間等の教科等横断的な視点に立ち、地元の一級建築士を講師に招いて、「昔の家：本郷家住宅」→「今の家：断熱性能」→「未来の家：エコハウス設計」という時系列のストーリーを展開した。生徒は「未来の家の予想図が、とてもロマンがある」と振り返った。



<エコハウスを設計しよう！>



<学校HP>

だいせん防災教育「生き抜く力」育成事業

「自助」から「共助」へ

大仙市教育委員会事務局 指導主事 石河 大介

「自分の命を自分で守る子どもの育成」と「自主防災組織づくりから広げる地域力の向上」をねらいとする本事業。そのメインとなる避難所開設訓練が、10月12日、大曲中学校で行われた。全校生徒及び教職員、地域住民や保護者に加え、消防や自衛隊関係者、市職員等参加者850人を超える本校ならではの大規模な総合防災訓練となった。

初期消火や災害緊急措置、生活水確保など、10の訓練や活動を体験した生徒の振り返りからは、「被災者の立場に立って安心して避難できるように考えた。」「避難所開設のため中学生でも地域のためにできることを確かめられた。」など、「共助」につながる防災意識の高まりが感じられた。



<心肺蘇生訓練>



<避難者に寄り添う>

平成25年スタートの避難所開設訓練は今年度で市内全中学校区において実施された。今後は、これまでの経験を生かし、各校において特色ある防災教育を展開していくことが期待される。

心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業

共に学び、共に生きる

大仙市立内小友小学校 校長 柴田 茂明

今年度より2か年計画で「心のバリアフリー推進モデル地区」の県指定を受け、大曲支援学校と交流及び共同学習を通して、児童、保護者の障害理解の推進に取り組んでいる。



- 今年度の取組の概要 <コラージュ作品制作>
 - 大曲支援学校との交流及び共同学習
 - 「ハローの会」という名称で、同じ学年同士で年2回(6月・11月)実施
 - 障害理解授業
 - 大曲支援学校地域支援部の協力で実施(4年生)
 - 保護者の障害理解の推進
 - 7月PTAでボッチャ競技体験(1~3年生)
- 成果と課題
 - 相手の立場で物事を考えたり、多様性を受け入れたりする姿勢を身に付ける貴重な機会になった。
 - 目指す児童の姿を学校全体で共有し、「自ら考えて関わることのできる児童」の育成につなげていきたい。

コミュニティ・スクールの取組

「ひらかれた、から」も「ともにある、へ

大仙市立協和小学校 校長 青池 研悟

コミュニティスクールとしての第一歩を踏み出した小・中合同の協和地区学校運営協議会である。地域学校協働活動との車の両輪と位置付け、小学校では「ともに前進」という言葉を学校教育目標の副題に掲げて地域と取り組んだ一年であった。

新たな活動を創始する負担を避け、学校で完結していた既存の活動を、単に「連携」「支援」ではない、地域の強みを生かした「協働」活動にすべく、運営協議会を通じて価値付け・意味付けをした。

【主な活動実績】

- 年間3回の協議会 □熟議(7月) テーマ「協和の子どもにどのように育ってほしいか」

【実現した主な活動】

- 部活動への地域指導者の協力
- 朝の緊急見守り活動(クマ対策)

【実施検討中の活動】

- 地域合同きょうわ祭(地域文化祭と学校祭の協働実施)
 - 園小中連携(3校種の相互連携) □地域運動会
- 委員からは、地域を巻き込んだ体験活動の活性化により、子どもの地域への関心の高まりなどの変容が感じられるとの評価をいただいている。学校、地域双方共にさらなる意識改革を進めていきたい。



<「協和愛」あふれた熟議>